

---

# 名前のない物語

とんかつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名前のない物語

### 【Nコード】

N6263Y

### 【作者名】

とんかつ

### 【あらすじ】

どこにでもいる普通の少年による復讐の物語。

誰も知らない、ダンジョンという存在。襲い来る魔物。倒すたび強くなる肉体。

通常のダンジョン物とは違うと思います。なぜならこの世界において、まだダンジョンというものは認知されていないからです。まあ濃密に言えば、ダンジョンなんてものは自体ありませんが。

処女作です。小説が大好きで、自分も書いてみたいと思ったので書

きました。自分が好きなものをいろいろぶち込んでいます。  
小説家になるうの機能もいまちわかっていないし、若干機械音痴  
なので、読みにくいところや変なところが出てくると思いますのが、  
よろしければその都度ご指摘ください。アドバイスなども大歓迎で  
す。  
それではよろしくお願いします。

## 第1話（前書き）

1話と2話はのちのち書き直します

## 第1話

俺には何も無い。

頭が良いわけでも、運動が出来るわけでも、魔法が上手いわけでも、顔が良いわけでもないし、夢なんてものも持っていない。

もしかしたら生きる理由すらないのかもしれない。

ただ、死ぬ理由がないから、毎日を漫然と生きていくだけだ。

きっと、このまま、何も無いまま生きて、何も無く死んで行くのだろう。

物語にでてくる村人のように。

特別でありたいと願いながら、特別じゃない自分の存在をなにより自分が一番よく分かっていて。

こんなはずじゃなかったのにな。なんてつぶやきながら。

俺には出来た妹がいる。この女性優位な世界に似つかわしいほど多量の魔力を内に秘めた妹が。死んだ両親と同じ病気に罹った人を救いたいなんて言う、優しい妹が。「兄さん大好き」なんて言っ自分を慕ってくれる可愛い妹が。

彼女は違う。何も無い俺なんかとは違う。そこらにいる有象無象の輩とも違う。正しく、物語の主人公になれる器を持っている。世界に二人だけしかいない、俺の大事な家族だ。

理解っている。俺は主人公にはなれない。何も持っていない人間を主人公にしてくれるほど、世界は優しくない、黒楼や紅蓮のような才が溢れる人間にのみ、世界は微笑むのだ。

それでも構わない。なりたいたと、子供心に感じた主人公になんてなれなくても。俺は妹のためになら、生きることが出来る。

妹の助力になることを生きる理由にしてもいいのなら。

俺の望むすべてを持っている愛すべき妹のために、この薄っぺらな人生を捧げることで、俺の命が、価値あるものになるのなら。そんな俺のモノローグ

## 第2話

「兄さん。ご飯出来たよー」

妹の呼ぶ声が聞こえて、俺は顔をあげた。

ふう、と一息を零して、肩に掛けてある布で汗を拭う。  
いつの間にか日も暮れている。夢中になりすぎたかなんて小さな笑  
みを浮かべて

「ああ。今行く」

と声をあげる。後ろに積み上がっている薪は後で片付けるかなんて  
考えながら、俺は家に入った。

妹は、食卓についた俺に駆け寄ってきて

「お疲れ様」

と言いながら、両手に大事そうに抱えている水を差し出してくる。

「ありがとう」

と言って受け取り、ゴクゴクと水を嚙下する。

それを妹は嬉しそうに笑いながら見る。

両親が病気で死んで1年、一度も変わる事のない日常の1コマだ。

「兄さん、明日は狩りに行くんだよね？」

妹が不安そうに尋ねる。

「ああ、そろそろ食糧が少なくなってきたからな。森に入って、ホーンラビット辺りを狩って来なきゃいけない。」

現在、この村には2人の人間が住んでいる。俺と、妹だ。村の北、東、南は森に囲まれ、西には、悪魔が棲むと云われる山が聳えている。人里まで徒歩で3日ほどかかるため、人の往来は無いに等しい。5年ほど前までは、父の知り合いの行商人が年に一度訪ねて来ていたらしいが、森で事故に合い亡くなったらしく、それ以降、一人一人として、この村に来ていないらしい。

当時4歳だった俺と妹も、その父の知り合いとは何度か会ったことがあると、父は言っていたが、当然のように覚えていない。

いや、そんなことよりも5年も前から、狂おしいほど可愛い妹を、その人はほとんど拝めていないことになる。人生損してるぜ。

「兄さん？」

……とにかく、この村は完全に自給自足だ。

何をするにも自分たちの力で成し遂げなければならず、今回のように食糧不足に陥るような時は、近くにある川で魚を釣るか、狩りに出かけるのである。

不安そうにこっちを見てくる、ため息が零れるほどに可愛い妹に笑いかけながら

「大丈夫だよ。この辺りの森に、人が仕留められないような魔物は出てこないはずだ。」

そう言って、全く心配性だなと笑う。

「それでも、まだ9歳だし、危ないよ、兄さんに何かあったら、私……わっ！」

泣きそうな顔も世界一可愛い妹を抱きしめる。

驚いた顔もとんでもないキュートだ爆発しそうだ。

「大丈夫だって。この1年で何度かしてきたことだし、あぶなくなったら逃げるし、それに、おれがお前を残して死ぬはずないだろ？」

そう妹の目を見ながら答える。

この会話も、何度交わしたか分からない。狩りに行くたびに、美の神の化身である妹は心配そうな顔をして訪ねてくる。だから、俺も何度も同じ言葉で返す。

そうさ。俺は死なない。さみしがり屋な妹を残して、俺は死ねない。

数日前、ウィズドム魔法学校からベルバード便が届いた。

内容は、俺たち兄弟二人を特待生として迎えたいというものだった。そういえば、両親が生きていたころ何度か街に連れられて行った事がある。街について宿に荷物を置くと、父は決まって髭の生えた白髪のお爺さんと話しこむ。

その間、よく二人で図書館の本を読んで待っていた。俺は勇者の冒険譚を、妹は魔法書や医学書などなにやら難しい本を読んでいた。一度読んだ本の内容は忘れられないらしい。

とんでもなく賢い奴だ。俺も読んではみたが何が書いてあるかさっぱり理解できなかった。父はあの爺さんの事を先生と呼んでいたから、きつとあの爺さんが魔法学校のお偉いさんだったのだろう。あの時は医者とばかり思っていたが。

一年前に、両親は死んだ。両親の病気は過去に例をみないものだった。体から魔素が徐々に抜けていき、決して戻ることはなかった。あらゆる薬を試したが効果は無かった。

魔素が消えた生物に待ち受けるものは死だ。動物、植物、人間、魔族、等しく死が訪れ、塵となって消えていく。

通常、魔素がなくなるなんてことはあり得ない。魔法を連続して使  
い続けるか、ドレインと呼ばれる禁魔法で吸い取られるかだ。しか  
し、前者は、魔力を限界まで消費し続けたとしても、脳が自動的に  
魔素の放出を辞めてしまう。意識が落ちてしまうのである。

ドレインについては禁魔法として指定されて2000年、今では使い  
手すらいない状態だ。

この2000年の間、生き物には形ある死が与えられていた。

俺と妹は、両親が塵となって消えていく瞬間を見届けた。もがき苦  
しみ、足から徐々に塵となっていくその一瞬一瞬を、網膜に焼き付  
けた。

手をつないで、決して目を逸らさずに。2人で、あの村で、4人の  
家で。

あれから、妹はただでさえ熱心だった勉強に更に励んだ。同時に魔  
法も並行して練習した。両親のように悲惨な最期を遂げてほしくな  
いと、泣きながら。

その姿を見て、綺麗だと思った。尊いと感じた。  
優しい妹のために、何かしたいと、本気で考えた。

両親が死んで、妹のために生きると決めて、すっかり忘れていたが、  
10歳になれば魔法学校の入学許可がおりる。

2人が死んだ時も音沙汰なかった癖に、今更になって連絡してきや  
がって。まあ当然か。俺は凡才だが、妹はそれこそ100年に一人  
の逸材だ。魔法学校としても逃す手はないだろう。

とにかくこれは渡りに船だ。

2人とも特待生なら入学金や学費もほとんどかからないし、これ以上妹がこの村で学べることも少ない。

街へ出よう。

手紙によると、入学は、降雪期を過ぎてから予定されている。となると、後半は時間に猶予がある。

今のうちに、武具、防具、食糧、衣類、雑貨などを必要なものをそろえよう。幸い村の周りは資源が豊富だ。

魔法学院宛てに、妹が了承の手紙を綴る。俺は字が得意ではないからな。恥ずかしいことだが。

書いた手紙をベルバードの足にくくり付ける。妹に万が一があつてはいけないので俺の仕事だ。過保護ではない。当然のことである。ベルバードはクエツと一啼きして飛び立っていった。一日もしないうちに学院に届くだろう。

俺は凡人だ。夢見がちでもある。毎日のように勇者の冒険譚を読んでいるし、多少は特訓もしている。とはいっても、半刻程度走ったり、軽く筋トレしたりする程度だが。

俺が今気にいっているのは、科学というものが発展した世界の少年が、こちらのような世界に来て、不思議な力で次々と悪を倒し、最後には魔王に攫われた姫様を救い出すというものだ。人は偉大だ。化学なんて言う迷信から、これだけの物語を創作できるのだから。

ただ、例えば俺がそんな立場になっても、彼らのようにはなれないだ

るう。例え神様に会って特別な能力をもらっても、例え今の知識もまま赤ん坊になっても、きっと、俺は今のままだ。大した努力もしない。変わるうとは思っているのに実行しようとしれない。変わるこ  
とができるのに、ありもしない未来だけを見ている。

妹が、いなければ。

両親が死んで、妹の力になりたいと思うようになってから、俺は今  
までしなかった努力をした。野草などについての知識を身につけ、  
料理も多少できるようになった。

なにかあった時のために、木の棒を持って素振りもしている。とに  
かく、多くの面で妹の役に立ちたいのだ。

妹はその間、ひたすら勉強をしている。既存の魔方円を組み合わせ  
たり、新しい魔法を創造したりと、発表したらまず間違いなく、魔  
法賞を授与できるだろうものばかりだ。

九才にして、魔法省に入るなんてこともあるかもしれない。いや、  
間違いなくある。

だけど……けどまだ、両親が死んだ病気の治療法は、その糸口さ  
え見つかっていない。

朝起きたら、雨が降っていた。ざあざあと、大きな音を立てて。ま  
るで光が降っているようだ。もしかしたら、雨期に入ったのかもし  
れない。

今日は狩りを予定してたんだが……仕方がない。可愛い寝坊助さん  
を起こして軽い朝食をたべてから、一緒に魔法についての研究をし

よう。

研究なんてつまらないけど、妹と一緒にならきつと楽しいだろう。そんなことを考えながら、俺は一人で笑っていた。

……………俺は死にかけている。

妹のために水を持って行こうと思って、水を汲みに出て、屋根伝いに井戸まで行こうとして、そして、切られた。

何かなんだか分からない。突然すぎる。

知らない奴だった。当然だ。こんなところに普通、人はこない。そいつは、黒い鎧を着ていて、後ろに2人の鎧姿の人間を引き連れていた。

そして、黒鎧が、家に向けて、その指を、差した。

やばい、やばい、こいつらはやばい！

何が起きたか分からない。それでも、これだけは分かる！

倒れられない！ 今倒れたら、妹が、妹まで、殺される！！

歯を食いしばれ。家の入口まで駆ける。奴らを通すな。

奴らより早く入口まで辿りついた俺は、立て掛けてあった木刀を握りしめ、奴らと対峙した。ここを一步も通さない決死の覚悟だった。

2人、殺した。振られた剣をさけ、木刀で首をへし折ってやった。

無我夢中だ。まるで絵本を読んでいるみたいに、音が、映像が、途切れるように進んでいく。

息が続かない。血が出すぎたのか、頭がくらくらして、目が霞む。

「……うとを、守るんだ。」

唇を噛み、言葉にする。

約束したんだ。妹を守るって、両親に。誓ったんだ。妹を守るって、自分に。

腕が重い。足が震える。だがしっかりと構えて、奴を睨みつける。

「……見事だ。」

邂逅してから、互いに発した言葉は、たったの一言だけだった。

黒鎧が剣を突きだす。だめだ。避けられない。

全ての動作がやけに遅く感じた。

ゆっくりと構えられた剣が、信じられない速さで突き出され、俺を庇うように飛び出してきた妹の腹に刺さり、俺もろともを串刺しにした。

「……っ！」

言葉にならない。なぜ妹が！

ズブリと音を立てて剣が抜かれる。同時に支えを失った俺たちは、

重なり合うように地面に倒れこんだ。

「ごめんね…… 兄さん…… 守れなかった。」

息も絶え絶えに言われる。こっちのセリフだ。俺は、守れなかった。謝りたくて口を開いたが、ヒューヒューと空気が漏れるだけだった。致命傷だ。

あつという間の出来事で、現実感を感じないが……俺と妹は、ここで死ぬ。

だから、妹の目をじっと見つめた。言葉にできない全ての想いを乗せて。

頬を打つ雨は、気にならなかった。

「兄さん…… 泣か…… ないで。死なな…… いで。生きて。」

妹が涙を流しながら言う。苦しそうに、手を出してきた。俺は最後の力を振り絞って、その手を握った。ふわりと、嬉しそうに微笑んだ妹を見て、意識は闇に包まれた。

第2話（後書き）

駆け足

### 第3話

雨が降っている。

ざあざあと音をたてて、雨が降っている。

ひどく鬱陶しい。頬を打つ雨が煩わしくなって、俺は目覚めた。

夢……か……。ひどい夢だ。妹が死んで、俺が死んで、そこには何も残っていないかった。

悪夢だ。両親が死んだ時も、こんな夢は見なかったのに……

頭が上手く機能しない。ボーっとしたまま、真っ白で、真っ暗なまま。

頬を打つ雨だけが、やけに鬱陶しい。

頬を打つ雨が。

頬を……打つ……雨……？

バツと体を起して周りを見渡す。

「……外？」

自分の声がやけに大きく感じた。

周りを見渡せば、いつも通りの光景が目映る。

井戸も見える。薪も置いてある。振り返れば、家もある。

いつも通りだ。そう、いつも通りさ。

ただ少し、寝ぼけていただけ。そうだろ？

「っ！！」

雨が鬱陶しくて、髪をかき上げようとして、気付いた。気付いてし

まった。

俺が右手に持っているものは……ナンダ？

紙？布？違う……袖だ。服の、袖だ。ひどく見覚えがある。

俺が作って、プレゼントしたものだ。

妹が……着ていた。

そこまで考えて、時間が止まった。

振り返るのに、どれくらいの間がかかっただろうか。

ゆっくりゆっくり振り返って、家の中を見て、家に飛び込んだ。

寝室に駆け込む。これが夢なら、いつものように妹が寝ているはずだ。

寝るのが好きだから、幸せそうな顔して寝ているはずだ。

もうちょっとーなんて言いながら布団を被り直すから、ほら起きな  
って笑いながら、起こすんだ。そうだろ？

寝室に妹はいなかった。

寝室だけじゃない。台所にも、お風呂にも、家のどこにもいない。

外に出る。地面に落ちている。服を拾う。

服以外はなにも落ちていない。

今まで気付かなかった。服の下には、地面には、血が滲んでいた。  
妹はどこにもいなかった。その亡骸さえも。

尋常ではない。普通はこんなことありえない。

だけど……俺は知っている。

人間がいなくて、服だけが残るといふ現象を、俺は知っている。  
一年前に両親が死んだ時も着ていた服だけが残った。

## 魔素の喪失

両親を殺した病に似た何かが今度は、妹を殺した。そう感じた。



「はは、笑える」

いつもなら妹を起こして一緒に食べて、おいしいねーなんて笑う妹を俺も笑いながら見ていたはずだった。

ポタポタと涙が落ちる。

笑った顔、怒った顔、泣いた顔。

色々な思い出が脳裏に浮かんでは消えていく。

握りしめた木の棒がボキリと折れる。

これは東に広がる大陸に伝わる、箸と云うもので、妹が文献で見つけて、俺が木を削って作ったものだ。

うわー難しいねって笑いながらポロポロとおかずを零す妹を笑いながら、ポロポロとおかずを零す俺を妹が笑っていた。両親が死んで色々大変だったけれど、毎日が楽しかった。

自殺しようと思った。両親も妹も死んで、俺には何もなくなってしまうから。

だけど、妹の最後の言葉が、生きるという言葉が、俺に呪詛のように突き刺さる。

生きる意味もなく、死ぬこともできない。

「ははは」

俺は力なく笑うだけだった。

次に俺を襲ったのは強烈な殺意だった。家を襲った奴らが誰だかは分からない。

だが、人間だったのは間違いない。

しかもとびきり強い人間だ。さぞ名のある人間に違いない。そして、おそらく、アレに命令したものがいるはずだ。

ただの人間が何の目的もなくこの場所に訪れて、何の目的もなく、俺と妹を殺そうとするとは考えにくい。

じゃあ誰が？

考える。分からない。わからない解らない判らないワカラナイ。

「くっくくく、ハハハハハハ！」

そもそも俺は考えるのはあまり得意じゃないんだ。

分からないならそれっぽい奴を全員殺してしまえばいい。

復讐だ。妹を殺したやつ、命令したやつ、それにかかわる全ての生物に、等しく死を与えてやる。

淡々と考えて、自分の中の何かが壊れてしまったことに気付いたのだった。

そのためには強くならなくてはいけない。

あの黒鎧。アレは怪物だ。

剣を構えてから突き出す動作、それが異常なほどに滑らかだった。

まるでそう在るのが当たり前かのように。

俺は自分に向かってくる剣を知覚していたはずなのに、ただじっと見ているだけで、気付いた時にはすでに刺されていた。

恐らくは達人とか、そんな域にいるのだろう。

なら俺はそいつらよりも強く、強くならなければならぬ。

妹の敵を討つために。

幸いにして、俺には死てがある。

西の森の奥の奥。

聳える魔の山の麓。

闇を飲む穴。

以前父が言っていた。

西の森の洞窟は魔を産む、と。

父は狩りをしていて帰りに突然の雨に降られ、たまたまあった洞窟に駆け込んだらしい。

そこで見たのは、まるで壁から産まれるように湧き出てくる異形。

何度殺しても生き返る魔物から、命からがら逃げ帰ったそうだ。

そこなら……。

何年かかってもいい。そこに出る魔物を殺し尽くした時、俺は力を手に入れられるはずだ。

俺は服や木の棒を持って外に出た。

なんの因果か、旅立ちの準備は整っている。

家はこのままにしておこう。

失うには、この家は思い出が多すぎる。

少し目を瞑る。

スウッと息を吸い込んで吐く。

そして俺は歩き出した。

目指すは西の森。

名前もない洞窟。

周りには誰もいない。

俺は独りだった。

## 第4話

森の中の空気は澄んでいて、木々の間から漏れる光が美しい。

西の森は百歩歩くごとに魔物と遭遇すると父が言っていたが、何故一匹も見かけないのだろうか？

歩く音と息遣いだけが聞こえてくる。

よく考えると鳥や虫の声すらしない。

長い間森に囲まれて生きてきたが、こんなことは初めてだ。

不思議に思いながらも、森の中を歩く。

村を出て2つは時を刻んだだろう。

世界でも類をみないほど巨大な山の麓。

そこに大きな穴が空いているのを発見した。

危険だといわれるにも拘わらず、どこか神聖さすら感じるこの場所において、闇を飲むように口を開くその洞窟はひどく禍々しく感じる。

「じじが……」

思わず声が漏れる。

ここが父の言っていた洞窟。

なるほど、父が近付くなと言ったのが納得できる。

まるで死そのものだ。

目的さえなければ近付くのさえ躊躇われる。

カタカタと体が震え、汗すら流れる。

ゴクリと唾を飲む。息が続かない。

ふと、刺された箇所の手を触れる。

刺されたハズのそこには、傷跡こそ付いているものの、何の異常もなかった。

いや、何も異常がないことこそが異常だ。

心臓を一突き。確かに刺された。そして、死んだハズだった。

体が冷たくなる感覚も、意識が闇に飲まれる感触も、最期に妹が見せた微笑みも、全部覚えていてる。

もう一度、洞窟を見る。

死が口を開けている。

死。死……か。

どうせ一度死んだ身だ。何を恐れるものがあるだろうか。

一步踏み出す。

体の震えは止まっている。

もう一步踏み出す。

笑みすらも零れる。

手持ちは僅かな食糧と、木の棒のみ。

「はは、ハハハハハハ」

俺が死んだって誰も気付かない。何も残らない。誰も悲しまない。

両親が死んで、妹が消えて、住んでいた場所さえ捨てて。もう俺には何も無い。

元からなかったのかもしれない。

だが、皮肉なことだ。

生きる意味と目的ができた。

「クヒ、ヒヒ、ヒヤハハ」

妹は言っていた。信じる者は救われるんだよって。

だけど裏切られた。何にかは分からない。でも確かに裏切られた。

妹は最後まで、救いがあると信じ続けたはずだ。



## 第5話（前書き）

携帯でも読みやすいようには注意していますが、読みにくかったら改善案とともにお知らせください。

## 第5話

洞窟に一步足を踏み入れた瞬間、一瞬だけ、ぐにやりと視界が歪んだ。

同時に、体全体にチクリと痛みが走る。

「……………ッ……………何だ？」

今のは何だったのか。思わず両手を見る。

握りこぶしを作り、開く。体に異常は見当たらない。

いつの間にか、不思議と痛みは消え、視界も正常に戻っていた。

「何だったんだ？」

疑問は残る。

しかし、問題がないのだからこれ以上このことを気にしていても仕方がないだろう。

俺は洞窟の奥を見つめた。

父曰く、壁から異形が生まれるらしいのだが、見渡す限りに生き物の姿は無い。

洞窟の中は薄暗い。しかし全くの暗闇というわけではない。

外の陽の光が差し込んでいるというより、壁そのものがかすかに光っているように感じる。

これは僥倖だ。少なくとも、奥に進んだことで光源がなくなること  
はなさそうだ。  
何も見えないところを手探りで進んで行って魔物に強襲なんてされ  
たら為す術がない。

よし。少しだけ先に進んでみるとしよう。

洞窟は一本道になっていて、数十歩も進めば曲がり角があるのが見  
える。

未だ魔物の姿は見えない。曲がり角を曲がれば、何か変化はあるの  
だろうか。

もしかしたらいきなり魔物が飛び出してくるかもしれない。  
少しだけドキドキしながら、俺はその道を曲がった。

曲がった先にあったのは、少し広くなっていた道だった。

先に歩いてきた道より、少し広い。それだけだ。

やはり魔物の姿は見えない。俺は落胆を隠せなかった。

だからか、気付かなかった。

「ガッツツツ!!」

衝撃とともに口から出たのは悲鳴だったのか。ただの空気だったの  
か。

天井と地面が何度も入れ替わるように回転しながら、俺は飛ばされ  
た。

幸い壁に叩きつけられることはなく、ズザーっという何とも惨めな音を立てて、俺は肩から地面に着地した。

何が起きたのか分からない。頭がくらくらする。体中がひどく痛い。倒れている状態で、自分を突き飛ばしたものを確認した。

それはまるで蛇のようだった。だがその姿は異常だ。

俺と同じほどの大きさの、蛇と呼ぶにはあまりに巨大な体躯。

大人の腕程度なら丸呑みできそうなほど巨大な口。

皮膚など簡単に貫けるだろうと予測できるほどに鋭利な歯。

通常の蛇は頭から尾にかけて細くなっていくのに対し、この生き物は頭と尾が同じ太さをしている。

さらに、蛇特有の舌がない。

見たことも聞いたこともない生き物が、鋭い歯と赤黒い体内を見せながらこちらを見ていた。

なるほど。これは異形だ、化けものだ。

今まで自分以外の生物はいなかったのに突然現れたということ、父の言ったように壁から生まれてきたのだろう。

そこまで理解すると同時に、俺は飛び起きた。

飛ばされた時も離さなかったのか、右腕には木の棒を握っている。

俺はそれを両手で握って体の正面に構えた。

蛇はこちらの様子を窺っているようだ。

「うおおおおおおおー!!」

咆哮と同時に俺は蛇に向かって駆けだした。

「らあー!!」

棒を真上から振り下ろす。

バツという音とともに蛇が左に跳んだ。

速い!!

目では追えたが体がついていけない。

蛇は着地と同時に再び跳躍。俺の顔めがけてその口を大きく開いた。

とっさに左腕で顔を庇うと、蛇はそのまま左腕に噛みついた。

痛い。痛い! 痛い!!

「あああああああ!!!!」

痛みを知覚したと同時に、噛まれた腕をブンブンと振る。しかし振るえば振るうほど蛇の歯は腕に深く突き刺さる。

「ぐぐぐ!!!!」

俺は振るうのを止め、地面に座り込む。

そして右腕に持っていた棒で、左腕もろとも蛇を叩いた。衝撃で更に蛇の歯が深く刺さったが、蛇の力自体は一瞬和らいだ。それを確認し、左腕に絶えず襲ってくる痛みに構わずに、俺は何度も叩き続けた。

十ほど叩いただろうか。蛇は大きく痙攣し動かなくなった。

「はあはあはあ」

死んだことを確認し、息を荒げた。肩を大きく上下させ、空気をむさぼるように取り入れる。

勝った……？

勝った。……そう。俺は勝ったんだ！！

グツと拳を握る。

魔物を一人で倒した。敵となる生物を、殺した。目標に一步前進した。そう感じた。

ズキリと左腕が痛み、ハツと我に返った。

蛇の頭を持ち、歯を抜く。血が滴るように落ちた。

左腕は、ボロボロだった。

これは前進なんかじゃない。

左腕に力が入らないことに気付く、事実気付く。後退だ。左腕に力が入らない今、これからは右腕一本で戦わなければならぬ。

魔物一匹、左腕を犠牲にしなければ倒せなかった。

もう一匹現れれば？二匹同時に来れば？更に強い魔物に遭遇すれば？待つものは死だ。今の俺が片腕で戦えるほど、この洞窟は甘くない。

俺はここで死に……復讐は……できない？

瞬間、蛇が光り輝き、俺の胸の前で小さな粒になって消えた。

「……………え？」

呆けたような声が出た。

何だ今のは？

魔素の消滅によって塵になったのかと思ったが違う。

光り輝き、粒子になって消えたのだ。始めてみた現象だった。

「……………え？」

そして気付いた。

先ほどまで、出血と疲労で重かった体がひどく軽くなっていて、左腕の傷が消えていた。

## 第6話

「どついうことだ？」

純粋な疑問だった。蛇に良く似た魔物、蛇ではないため便宜上、ノツチとでも名付けようか。ノツチに噛まれた左腕は感覚を無くし使い物にならなくなったはずだ。

実際、力を入れようとしてもピクリともしなかった。痛みは感じていたが感覚は一切なかった。俺は医師ではないがある程度の知識はある。おそらく切断することも考えなければならぬほどの怪我だったはずだ。

それが治っている。あれほどあった痛みもすっかりなくなっている。もしかして、今の魔物も怪我も全て幻覚だったのか？

思わずそう思い左腕をジツと見つめる。良く見るとつつすらとだが歯型が付いているのを見付けた。今までの人生で腕に歯形なんて付けられた記憶はないため、これはやはりノツチによるものだろう。ともすれば当然、今のは現実となってくる。

現実、なのか？

あれだけの怪我が一瞬で治るようなことが起こりうるのか？魔法という言葉が浮かんできたが、自分には回復魔法は使えない。いや使えたとしても回復魔法というものは治癒力の促進でしかない。治りやすくなるものではあっても治るものではないのだ。

「……まあいいか」

分からないものは分からない。今重要なことは、左腕がこれからも使えるということだけだ。儲けものだと思っしかないだろう。そしてもう一つ。

その場に立ち上がり体をほぐすように伸ばす。

そして一度座りまた立つ。さらにその場で飛び上がる。最後に手にした棒を軽くふるう。

「やっぱりさっきより、体が軽い？」

ほんの少しだが、ノツチと戦う前より体が軽くなっている気がする。気のせいかもしれないが、そんな気がする。

「……………まあいいか」

疲労感もない。体も動く。戦う意思も、目的も、俺には残っている。それならば戦うしかない。戦って戦って、強くなるしか俺に道は残されていないのだから。

「そうだろ？」

そう言って、目の前の壁を睨む。

かすかに光る壁、その一部が少しずつだが黒く染まっている。これが、誕生の瞬間なのだろう。壁から生き物が生まれるなんて俄かに信じがたい話だが、見てしまっている以上認めるしかない。

何度殺しても生まれ出ると父は言っていた。その話を聞いた時はいよいよ頭がおかしくなったかと心配したものだ。壁から生き物が生まれるなんてそんな馬鹿な話があるわけがないと思っていたが……なるほど、生まれる以外にも表現のしようがあるだとも思っていたが……なるほどなるほど、実際に見てしまつと生まれる以外に表現のしようがないものだ。

やがて壁はぐにやぐにやと蠢き、母が子を送り出すかのようにノツチが産み落とされた。

先手必勝！ ノツチはまだこちらに気付いていない。後ろからそろりと近付き、手にした棒を渾身の力を持って頭に叩きこむ。

バキツという音とともに、棒はノツチの頭部にめり込んだ。叩きこまれたノツチは何が起きたのか分からない様子で、ふらふらと頭を震わせながらその口をこちらに向けた。

やはり目はないようだ。あるのかすら分からないが、その小さそうな脳でも脳震盪くらいはおきるのだろう。ノツチを見ながら、そんなことを思う。

頭が妙に冴えわたっている。

さっきノツチを殺してからやはり何か変化したのだろうか。

ノツチはこちらに大きな歯を向けて威嚇している。しかしやはり体が上手く動かないのだろう。それ以上の事はしようとしなない。それならば……右腕を大きく振り上げ、棒を頭に叩き込む。バコっとい

う音とともに再度ノツチの頭に棒がめり込んだ。

ノツチがひるむ。もう一度叩きこむ。ひるむ。叩きこむ。

九度繰り返したところでノツチは大きく痙攣し、動かなくなった。隙を突いたことによる、無傷の勝利だった。

ノツチが光となって消えるその様子を今度はじっくりと観察する。体全体が発光し、同時に消えていくのが分かる。

それはどこか、降雪期に降る雪のように儂く美しい。

毎年かかさず妹と初雪を見てきた。両親が死んだその年も。

空から大量に降り注ぐ神秘が妹は大好きで、年齢以上に大人びている彼女がその時だけは子供のようにはしゃいでいた。

その姿が酷く儂げで眩しくて懐かしい。

ふと気付く。大気に混ざるように消えていたノツチの光の粒子が不思議な動きをしている。何かを探しているような……

そしてやがて光の粒子は消えるのをやめ、光を触手のようにこちらに伸ばしてきた。

不思議と避ける気にはならない。

永いようで短いこの時間が、ひどく大切なものに思えた。

胸の辺りまできても触手はその動きを止めない。それどころか、俺の胸にするりと入り込んできた。

それでも身動き一つしない。当然のように動くソレを当然のように受け止める。

全ての触手が入った瞬間、体が薄く光った。

「……………おおお!？」

自分の体が光るといふ初めての体験に驚きを隠せない。

「ッ!！」

そしてやはりと気付く。森山に囲まれた生活と緊張戦いによる興奮によつて、今の自分の感覚は鋭い。体がさつきよりもわずかに軽くなり、連続で叩きつけたことによる右腕の痺れが綺麗になくなつていた。

普通ではないこと。

……………仮説を立てる。

一つ、この洞窟では何故か、バトル毎に全回復する。

一つ、この洞窟では何故か、バトル勝利毎に全回復する

一つ、この洞窟では何故か、バトル勝利時、敵のなにかを吸収し、体の回復に当てる。

「うーん……………」

しかしこれらは所詮、仮説の域を出ない。

検証するには負けなければならず、魔物との戦闘による敗北とはほとんどが死に繋がる。つまり

「まあいいか」

……そういうことだ。

分からないのなら分かる時に考えれば良い。  
少なくとも今、試しに負けてみることもなんてできないのだ。

「それに、お待たせするなんて申し訳ないしな」

そう言つて、上を見上げる。

天井の壁が蠢き、魔物を生み出している。  
すでにその口は見えているが、残念なことに棒は届きそうにない。

それなら、落ちた瞬間を……狙う！

右腕に力を込める。

そして、天井からノツチが吐き出された。

跳躍するようにノツチに向かう。

まだヤツは空中にいて身動きが取れない。

俺は棒を思いつきり横に薙いだ。

「……ふう。案外楽に倒せたな。」

息を吐き、光の粒子を体に受けながら言う。

いつの間にか独り言が癖になってしまったようだ。

横に薙いで壁に叩きつけられたノツチをすかさず追い殺す。やはり  
全部で十回ほど叩かなくては死なないうだ。

そして殺した後は体が軽くなり、疲れも取れる。この調子なら何度でも戦えそうだ。

「ふふふふふ」

思わず笑ってしまつ。

何度もノツチを殺して、真正面からでも圧勝できるよつになるつ。  
目下の目標は……千……いや一万だ！

残り9997体。殺しまくつてやる。

「よーし、やるぞー！ー！」

今の俺はきつと、穢れを知らない子供のように爽やかな笑顔だろう。  
キラッ。

「……………ぐあああああああ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

キラッってなんだよ！

興奮しすぎておかしなこと考えてしまった！

あああああ恥ずかしい！

その後しばらくの間、その場につずくまっ悶えていた。

## 第7話（前書き）

よろしければ感想等お願いいたします。

## 第7話

「きゅうじゅう……ななあああ！」

そう叫びながら、こちらに飛んでくるノツチを叩き落とす。

これで9997体

現在使っているのは槌によく似た武器だ。

50体くらいノツチを倒した時に、ノツチの死体が消えたところに落ちていた。

使っていた棒は折れてしまったので、これを使ってみたのだが存外使い易い。

あの後、悶えていた時にノツチの体当たりをくらい吹き飛ばされたり、ノツチの尻尾を掴んで振り回そうとしたらヌルヌルした何かが生に付いて大変だったりと色々あったが、大きなダメージをくらうことなくここまでできた。

「よし！ 次イ！！」

そう言いながら壁から生まれようとするノツチの下へ跳躍し、その頭に槌の一撃をお見舞いし、怯んだ隙に連撃を加える

学習能力がないのか、やはり別個の個体なのか。壁から生まれる時は無防備になってしまふというのにこいつらは懲りもせず壁から生まれる。

……いくつか、おかしなところがある。  
まず、ノヅチが弱くなったのか自分が強くなったのか武器が良いのか……2回ほど叩けばノヅチが死ぬようになったこと。

次に、ノヅチを倒した時に出る光が初めに比べて減っていること。  
それに伴って、体が軽くなる感じや、疲れがとれる感じが小さくなっていること。

そもそも武器が残ったこと。  
気のせいか、倒してから出現するまでのペースが速くなっていること。

まだある。

この洞窟に入ってどれくらいたったのか。少なくとも1日や2日じや足りないが……その間俺は、食事排泄睡眠を行っていないこと。  
その必要を感じないこと。

疑問は尽きない。

……それでも俺は戦うことをやめられない。  
復讐を妹が望んでいるなんて思わない。優しいヤツだったから、どちらかという可悲しむ可能性の方が高い。

だけど復讐を果たさないで暢気に生きることなんて俺には出来ない。  
そしてそのために、些細なことなど気にしていられない。

チラリと壁を見る。

黒く蠢くそれは、今にも内包している魔物を産み出しそうだ。

あと2体で目標に到達する。

ノツチを容易く倒せるようになった今、達成することは難しくない。

「少し奥に行ってみるか。」

この洞窟の奥に何あるかは分からない。

意外と角を曲がればそこが終点かも知れないし、想像も及ばないくらい深いのかも知れない。

ノツチよりも遥かに強くて、俺じゃ到底適わない魔物だっているかもしれない。

でももうノツチじゃ物足りない。

何かあったらここに帰ってくればいい。

何もなくてもここに帰ってくればいい。

少々の怪我ならノツチを倒せば治るし、振り幅は少ないが倒すことで成長を実感できる。

軽い気持ちで決める。

「……………?」

おかしい。

壁から魔物が産まれてこない。

黒は刻一刻と大きくなっている。

現在でノツチに倍近い大きさだ。

それでもまだ大きくなろうとする闇を、俺は呆然と見つめることし

かできない。

感じたのは、期待と小さな不安。  
何が起ころうとしている。

そしてそれはノツチの約4倍という大きさになると、その動きを一瞬だけ止めた。

産まれ出る兆候だ。  
槌をグツと構える。

何が出てきても、壁にハマっている間に倒せばいい。

決断し、駆ける。

この洞窟に入る前までの自分では考えられない速度だ。

果たして、壁から産まれたのはノツチだった。  
安堵と、少しの失望。

いつも通りにノツチを横から殴る。  
槌の威力に加え、突進による惰力も加わる。

衝撃で吹き飛ぶノツチをすかさず追撃する。

槌を振り下ろす。それだけで容易く光の粒子となって体に取り込まれた。

「よし！！ つぎ……は？」

振り返り、声が漏れた。

一度もなかった。この洞窟で10000近い戦闘を繰り返してきた

が……2体同時に出たことすら一度もないというのに。3体。ノツチがいた。

啞然とする俺を置いて、ノツチはその歯を俺に向ける。

考える暇も与えてくれない3体同時攻撃。

幸いなのは、前方からの攻撃でしかなかったこと。

腕、脚、頸。それぞれを喰らうように飛びかかってくる。

恐怖はない。経験を得て、ノツチの攻撃を遅いとすら感じていた。

冷静に対処する。

腕への攻撃を突き出した槌の先端で逸らし、脚への攻撃を引いた柄で流す。最後に頸へ迫るノツチに回転させるように槌を叩き込む。

刹那の出来事。一つ数えるよりも速く、三体の猛攻を防ぐ。

最後の一体は地に横たわったまま光になる。一撃だった。

残りの2体を睨む。

その瞬間、ビクリと体が震える。

……怯えている？

魔物が？俺に？

思わず笑みが零れる。歓喜と表現してもいいかもしれない。槌をダラリと下げつつノツチへと歩く。

そして……絶望が俺を襲った。

## 第8話

強くなった。強くなつたはずだつた。

ノヅチがこちらを見て恐怖したことから、強くなつたことは間違いないはずだ。

だから今、達成感とか優越感とか、そんなものを感じていたはずだ。

目の前で、二匹が互いを喰らい合う。

その赤黒い口を広げ互いに尾を喰らい合う。

酷く緩慢に。酷く尊大に。

……変化は唐突。

二匹は交わるように、一体の龍と成す。

現れた黒い体より更に暗黒い瞳が、刺すように、それでいて慈しむように俺を貫く。

……俺はこの生物を知っている。妹と勉強していた時に見た『伝説の魔獣大全』。その4ページ目。

始まりと終わりを司ると云われる伝説の龍。

ウーロボロス。

一夜にして大陸を一つ沈めたという言い伝えにのみ名を残す母なる龍の子。

腕も脚も翼もない。鰐のような口と鋭い瞳をもった、ノヅチを何倍も大きくしただけのような姿。それなのに、醜悪と言っても過言ではないかつての面影はない。

そんな、伝承にしか残らないような存在が、空を漂うようにしてこちらを見ている。

世界は音を無くし、自らの呼吸と胸の鼓動、果ては血の流れる音すら聞こえそつだ。

恐怖が体を包む。勝てない。それほどまでに絶対的な差を感じる。声が出ない。息ができない。体が動かない。今まで出会ったことのない圧倒的な存在に、体がその機能を失っている。

ここで死ぬのか？ 元から無理だったのか？ 復讐なんて、強くなるなんて……生きるなんて……っ！！  
それなら、なぜあの時死なせてくれなかった！！  
そんなの……っ！！

「いつまで呆けているつもりだ？」

「……え！？」

「いつまで呆けているつもりかと聞いているんだ！！」

困惑する。……喋った？ 龍が？

思わず謝罪を口にする。

「え、いや、その、すみません。」

「全く！ それにいつまでここにおるつもりだ！！ 毎日毎日飽きもせず同じことの繰り返し。見ているこちらの身にもなれというものだ！！」

大層ご立腹なご様子である。

何を言っているか分からないし、何と書いていいか分からない。

「左腕を怪我したり、いきなり奇声を発して転げ回ったり初めはまだ面白があった。しかし、楽に倒せるようになってからはトンとつまらん！ 楽に倒せるようになったのならさっさと奥に進まなか！！」

「す、すみません」

「そもそもだな！ ……………！！」

こちらのことは構わず、龍の口撃は終わらない。

「あ、あの…！」

「であつてだな！ ……む？ なんだ？」

「す、すみません。あの、その、見て……らしたのですか？」

「うむ。ここに住んでからしばらく。ロクな娯楽がなくてな。」

娯楽で。

いや、それよりも……

「はあ。そうなのですか。えっと、どうしてあなたのような方がお……私の前に姿を現したのですか？」

そう。気になるのはそこだ。ウーロボロスが最後に確認されたときれるのは何千年も昔の話だ。実在しないとまで言われる龍が、何故、今日の前に現れて、しかも自分に話しかけているのか。

「うむ。さきほども言ったであろう？ ここには娯楽が少ない。だからこそ貴様を見ていたわけだが同じことばかりでつまらんだ。心地よい殺意に目を向けたは良い。それが強くなるうとしておるのも理解できる。しかしな、それがいつまでも入口でたらだと戦っておるのを見るのはなんとも退屈なものよ。いくらこの洞窟において、倒せば倒すだけ強くなるとしてもな。もっと色々な奴との戦いが見たいわけよ。」

龍は続けて話す。

「ノツチ、と貴様が名付けた魔物。確かにコイツは龍種に分類されるにしては弱い。その上得られるものも多い。うむ。こいつばかりに目が行くのも分からんでもない。しかし、しかしだな。この奥に

はコイツより強いがコイツより遙かに糧になる魔物が大勢いるのだ。見てみると、そろそろ得られる糧も少ない。もっと強くなりたいのなら、ここいらで先に進むべきではないか？　そう言いに来たのだ。

「

内容に、頭が白く染まる。考えるよりも先に言葉が出る。

「強くなる……強くなれるのですか！？　魔物を倒せば、倒すだけ

……強く！！」

「む？　知っててここに来たのではないのか？　うむ。この洞窟ではな、倒した魔物を糧に強くなることが出来るのよ。そして倒す相手が強くなればなるほど、その恩恵も大きい。まあ、我は詳しいことは分からんがな。詳しく知りたいのならば、奥に来るがよい。」

「奥に……？」

「うむ。ここが第一層だからな。ここから……五つ下りたところ。そこに我らの住処がある。興味があり、生きて辿りつけたのなら、詳しく教えてもらえるだろう。貴様は人間にしてはよい殺意に溢れておる。招待しようぞ。」

そう言い残して、龍……ウーロボロスは溶けるように消えた。

膝を突く。話している途中でいつの間にか恐怖心は消えていたが、それでも身を焦がすような圧迫感は続いていた。会話するだけで、とんでもなく体力を消耗していた。

しかし得たものは多い。

戦って勝てば勝つほど強くなれるということ。

経験を積むつもりで戦ってきた。その中に感じた疑問。これを知ることが出来たのは大きい。ウーロボロスの出現に絶望すら覚えたが……なぜならそれは等しく、希望だから。

## 第9話

軽く息を整えた後、二階層に来た。

俺がずつと戦ってきた小部屋から、少し進んだだけでその階段は見つかった。

どれくらいの時間が経ったかは分からないが、こんなに近くにあるものにすら気付かないなんて、と自分を笑う。

草原。

ここを表現するにはこの言葉が一番近いのだろうか。

地下とは思えないほど広大なフィールド。後ろを振り返り目で壁を伝っていくと、地平線が見えるかと思うほどに本当に遠くまで続いているのが分かる。

天井は高く。空間がネジ曲がっているような錯覚を起こす。

三階層へ行く道はすぐに見つかった。

一切の障害物がない恩恵か、階段を下りてからまっすぐの位置に巨大な穴のようなものが見える。まっすぐに歩いて行ければ良いのだろうか……

今まで敢えて無視してきたが、仕方なく天井に目を向ける。

地上に魔物は一体もない。空には、数え切れないほどの魔物が飛び交っていた。

空一面に広がる龍凄群。確認できる龍種は二。ヴィーヴルとギープル。

ヴィーヴル。

蝙蝠の翼と蛇の体、そして宝石の瞳を持つ龍。宝石の希少性故に乱獲され、現在ではほとんど姿を見ることが出来ない。

ギーブル。

翼の生えた蛇龍。雑食で、人間すら食らう龍。口から毒性のある液体を出す龍。その危険性と弱点故に討伐され、現在ではほとんど姿を見ることは無い。

記憶にある情報を反芻する。

どちらも絶滅危惧種に指定され、討伐し指定部位を持ちかえれば多額の報償を得られるはずだ。

まあ今は興味無いが……。

空を飛ぶ生き物に槌は届かない。当たり前だが。

出来れば素通りしたいが……無理……だよな。一番近い二頭、こっち見てるもん。さっきまであんなにギヤーギヤー言いながら争ってたのに……。

空を飛べるということはそれだけで脅威だ。

一方的に獲物を狩ることができる。今回で言えば、その獲物は俺なわけだが。

弓なんてものを持っていない今、槌だけで倒さなくてはならない。というか……倒せるのか？

考えている間に襲ってきたわけだが……。

「ギー……！」

ヴィーヴルが奇声をあげながら突っ込んでくる。

蝙蝠のような羽根をバタつかせる姿はひどく滑稽だ。

あれ……？ 遅い？

その速度がやけに遅く感じる。

その蝙蝠の羽根、宝石の瞳、食らいつこうと広げる口。全てを観察して尚も余る時間。

左前方へ飛ぶように移動し、その慣性で槌を振る。

吸い込まれるように下顎に当たり、飛んできた速度以上の速さで後方に吹き飛び、そのまま空中で光になった。

次いでギールが襲ってくる。

蛇が地面を這うように空を縫う。生えた翼は鳥よりも深く風を掴む。だが……！

「遅い！！」

それでも今の俺には遅く感じる。

ノツチで慣れたからか、特殊な動きも苦にならない。

ギールに向かい地面を蹴る。

弾かれるように体は地を離れ、自分の身長の三倍ほどの高さまで打ち上がる。

驚きからか宙に止まるように翼を動かすギールに、槌を一撃。

空に浮かぶ龍淒群に突っ込むように吹き飛ぶ姿を一目し、地面に降り立つ。

俺は……強い……！？

体感する。

大人が数人がかりで討伐していたというこの二頭。

それを一人で！ 一撃で！！

これでもまだ奴には届かないだろうか……。強くなっている実感が堪らなく嬉しい。

手に馴染んだ槌を一撫で。

「ふふふ」

少しだけ笑う。

気が付けば……

空一面に広がる蛇龍の群。

蛇の瞳と宝石の瞳。

その全てがこちらを見ている。

煩わしいほどの鳴き声は鳴りを潜め、静寂の中にあるのは彼らが奏でる羽音だけ。

争っていた筈の二頭は恐らく……新たに現れた異物を排除することに決めたようだ。

そして羽音すらしな静寂。

二種数百頭はほぼ同時に羽ばたきを辞め、世界の法則に従い急降下してくる。

目標は自分。

捌き切れるか……？

考えながら二つ後ろにステップを踏む。

ノツチ三連星でコツは掴んだ。

数は全く違うが……最低でも、あの時の動きを数重繰り返す!!

轟音。

槌によってその軌道を逸らされ地面に穴を空けてゆく。

柄、先端、面。

オールを漕ぐような動きで槌を動かす。  
回す回す廻す。

槌で弧を描く。

これは……ッ!!

気付く。円運動。

これが一番力を入れずに、自然体のまま戦える!

これが一番効率良く、敵の力を流すことができる!!

自分の近くで爆発が続く。

自分を中心に周りにクレーターが出来る。

数十を捌いた。

それでもまだ、ただの一度もダメージを負っていない、が。

「数が……多すぎるっ!!」

流れ星の如く降り続ける龍星群。

終わりの見えない戦いに疲労が溜まっていく。

捌き損ねた一撃が腕を掠り服を切り裂く。

頬、腕、脚、傷は少しずつ増えていく。

「っ!! ……しまっ!!」

激突の衝撃で足場が崩れる。

同時にバランスも乱れ、体がのけ反る。

「ガッ!!」

腹部に衝撃。後方に吹き飛ばされる。

一度、二度、三度。

バウンドするたびに体が地面に叩き付けられる。  
それでも……！！

四度目のバウンド。

そこで地面に足を付け、踏ん張ることで再び弾かれることを防ぐ。  
それによって地面に二本。長い線が引かれる。

だけど……倒れることはしない！

今ここでそんな失態は侵せない！！

歯を食いしばり再び構える。

構え……ようとして気付く。

手の中には感触がなくて、遙か前方に馴染んだ柄が見えることに。

腕の中に重みがなくて、遙か前方に見慣れた物体があることに。

方角を変えながら迫ってくる二種に掻き消されるように見えなくな  
ったが……ここまで揃えば理解する。

槌を……武器を……落とす！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6263y/>

---

名前のない物語

2011年12月30日02時45分発行